OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フッサールにおける時間意識の作用について
Author(s)	家高, 洋
Citation	カルテシアーナ. 1994, 12, p. 99-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66953
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フッサールにおける時間意識の作用について

家高洋

はじめに

フッサールの現象学にとって、内的時間意識の領野は、「根源的」である。(1) このことは、例えば、対象的なもの全ての現出だけでなく、自我の現出も時間の中に組み込まれうるという、その普遍性のためだけではない。時間意識の領野が「根源的」であるのは、逆説的にも、それが、『イデーンI』で呈示された現象学にとって「難点」を示す（III/1, 182）という点にあると考えられる。

『イデーンI』の現象学的分析において呈示された意識の成立の基盤には、「感覚的なヒュレーと、志向的なモルフェー」（III/1, 191）がある（『論理学研究』においては、ほぼ、統握内容と、統握 Auffassung 作用とに対応する）。フッサール自身、これらの概念の導入において、多少、留保を付けているが、全体の枠組みとしては、素材としての非志向的な前者を、形式としての志向的な後者が「活性化して（beseelen）」、何かを何かとして現出させる、あるいは、何かが何かとして意識される、という説明のシステムが採られていると言ってよいであろう。このような枠組みの難点を、

時間意識の領野は示すのである。では、それは、どのような難点と考えられるのであろうか。

まず、感覚的なものは、形式にとっての素材としてただ単に存在しているのではない、ということがある。「あらゆる構成は、統握内容—統握という図式を持つとは限らない」(7, Anm.) とフッサール自身が注記しているように、時間意識の領野は、『イデーンI』での志向性の説明のシステムは当てはまらないのである。つまり、感覚は、既に時間意識において構成されたものであり、志向的な性質と無縁なものではなくなる。したがって、形式と素材、作用と内容という区別が曖昧になり、この曖昧さこそが、『イデーンI』の分析に対する一つの「難点」となる。そして、感覚がこのように明らかにされることで、志向性や構成という現象学の根本的な概念の妥当性の範囲もまた問われることになる。

ところで、時間意識の分析が問題として明らかにするのは、意識の機能の成立の説明としての「統握内容—統握という図式」(以下、「図式」と略する) の妥当性の範囲だけではなく、意識自身の在り方もあると我々には思われる。

フッサールの現象学にとっての意識は、経験論の主張のように、内容をただ反映することに留まらない以上、意識には、何らかの作用的な性格が不可欠になる。「図式」における統握も、意識の作用である。しかしそれは、意識以外のものの現出に関して主題的に考察されており、統握自身の、もっと広く言えば、意識の作用自身の在り方、現れ方に関連付けて考察されてはいない。この在り方の問題を、フッサールの言葉では、時間意識の自己構成 (自己現出) の問題を、時間意識の分析は明らかにしたと我々は考える。つまり、「図式」によっては、時間意識の自己構成に対してアプローチすることができないのである。この小論の課題は、「図式」の説明のこの限界と、時間意識の自己構成の内実の明示である。もちろん、作用を充実との相関関係において考察することは、問題にはならない。というのは、充実を

めざす作用は既に意識されているのであって、意識自身の自己構成とは別の事態であるからである。

考察の場は、「図式」の難点が明らかになった時間意識の分析である。[2] 我々の課題は、時間現象そのものの説明や解明ではなくて、この分析の成果から、意識の捉え方を得ることにある。『論理学研究』以来、フッサールは、意識を作用（Akt）と捉えてきた。作用としての意識の考え方を、フッサールの批判を通じて検討する。この過程で、意識は、どのようなこととして捉えられてはならないのか、ということが明らかになり、そのことによって、各々の概念の規定も明らかになるだろう。[3]

考察の順序は、以下の通りである。まず、時間の現象についてのブレンターノやロッツェの考え方に対するフッサールの批判をもとに、意識の作用が不可欠であることと時間意識の問題とが明確にされる。次に、フッサールの最初の解決に対する自己批判を通じて、つまり、「図式」の放棄に到る過程を明らかにすることで、意識に対するアプローチの仕方が一般的に限定される。そして、時間意識についてのフッサールの最終的な考察と問題点とを概観して、最後に、このことを念頭に置きながら、意識の自己構成の作用についての可能な考え方を呈示する。

第一節　時間意識の問題について

1　フッサールによる、ブレンターノの理論の批判

まず、「時間の起源」の問題についてのブレンターノの理論に対するフッサールの批判を概観する。というのは、ブレンターノの理論は、心理学と現象学との中間的な性格を持ち、この理論に対する批判によって、現象学の独自の立場が明らかになるからである。

さて、ブレンターノの理論の中間的な性格とは、第一に、ブレンターノ以前の心理学者達が行っていた生理学的な説明によっては、時間の現象は説明できないということである。この点は、現象学と共通である。しかし第二に、ブレンターノ自身の理論もまた、従来の心理学の諸前提を引き継いでいるために、時間の現象を適切に解明できない、ということである。この点がフッサールによって批判されるのである。

第一の点について述べよう。ブレンターノ以前の心理学者達は、時間概念の起源の問題を、音や色の概念の起源の問題と同じであると考えていた。例えば、ある色を我々が感覚するのと同じく、色の持続もまた、感覚する、というように。つまり、性質や強度と同様に、時間的な持続も、感覚の内在的な一つの契機であり、外的な刺激が持続することによって、感覚された持続が主観において引き起こされる、と考えられていた。しかしこの考えは、すぐわかるような「誤り」である(12)。というのは、刺激が持続する、ということは、感覚もまた持続する、ということを意味するだけで、感覚が持続するものとして感覚される(知られる)、ということをまだ意味していないからである。

刺激が感覚を引き起こし、また、刺激が続くことで感覚も引き起こされ続けるとしても、その感覚が刺激と共に消えてしまって残っていないとすれば、つまり、何らかの仕方で記憶されていないとすれば、時間的な経過そのものは知られないであろう。従って、時間的な経過がある、ということは、刺激や感覚が単にある、ということ以上のことを示している。「刺激」や「感覚」は、時間的に経過するもの(内容)そのものの「説明」にはなるかもしれないが、それらの存在だけを指摘しても、時間的な経過の現象の説明にはならない。この現象には何らかの「想起」が不可欠であると予想される以上、それは、意識の、しかも意識のはたらきの領野に関連していると考えられる。

時間の起源の問題についての生理学的な説明に対するブレンターノの以上の批判は、この問題の様々な事象を、意識

の機能において解明することの出発点になっている。しかし、意識の領野が見出されたとしても、この領野を扱うアプローチの仕方が不適切であることもある。というのは、この意識の領野が、他の事象に対してある種の独自性を持っている場合、これを考慮せずに意識を分析するならば、この独自性は、消えてしまうからである。「刺激」などの生理学的な概念で意識の領野を適切に解明できないように、意識についての不適切な概念をそのまま使うことでは、現前野（時間経過の現象が生じる場）の分析は、できないであろう。

ブレンターノの理論に対するフッサールの批判の要点は、アプローチのこの不適切さである。フッサールの考え方を適切に位置付けるために、その批判を次に見てみよう。

「刺激」や「感覚」の存在だけでは、時間的な経過は知られないことは既に明らかにされた。また、感覚の内容が保持されることが必要であるとしても、それがそのまま残っているのでは、まだ時間的な経過についての知にはならない。というのは、例えば、時間的な順序に従って現れるメロディーの知覚の場合、感覚の内容がそのまま残って感覚され現れているとするならば、メロディーの音すべてを合わせた不協和音のようなものしか聞こえず、メロディーそのものは聞こえてこないであろう。内容の何らかの変様が必要なのである。しかしこれは、ブレンターノによれば、「感覚」や「刺激」の出来事ではない。「刺激」は、現在の感覚内容を産出するが、心理学的な立場に立つブレンターノにとって、刺激が消えれば、感覚も消える。しかし、感覚は、その本性上、心的な領域において、それ自身産出的になり、その内容を再生する、とブレンターノは言う。このことによって、諸表象の連続的な系列が、そのつどごとの表象に結合することになる。だが、先に述べられたように、内容は、ただ再生されるのではなくて、そのつどごとに変様を被りつつ再生されるのである。この変様がなすことは、表象の内容に関しては、ほとんど同じであるが、その時間的な性格を変え

ていくことにある。以上が、ブレンターノの「根源的連合」説である。

この「心理学的な」理論の中で、フッサールが特に注目するのは、時間的な変様がどこに帰されるのか、ということである。この変様が生じることは、ブレンターノにとって、時間契機という新しい一つの契機が、表象にそのつどごとに付加されていくことを示す。そして、この契機は、想像（Phantasie）の領域において産出されると言われる。

つまり、ブレンターノにとって、時間表象の起源は、内容への契機の付加、すなわち、内容自身の変化に存することになる。時間の経過現象の成立の説明において、ブレンターノの理論のように、内容の変化の側面のみが強調されれば、それに相関して、意識の作用の側面は、この現象の成立のための役割を果たさなくなる。すなわち、意識は、ただ、内容を反映するという性格だけしか持たなくなる。このような場合には、「過ぎ去った」ということは、実際には生じない、ということが、ブレンターノの理論へのフッサールの批判である。

例えば、体験された音Aが、今さっき鳴ったとしよう。ブレンターノの理論によれば、それは、「根源的連合」によって再生産されてはいるが、そのことと共に、時間契機がそのつどごとに付加されるので、強度などの性質は弱まりつつ、連続的に保持されている。

さて、このことが示しているのは、フッサールによれば、音Aは過ぎ去った、ということではなくて、実は、まだAは現在しつつ残っている、ということである。「過ぎ去った」という契機が付加される以上、この音は、ブレンターノにとっては、「過去」でなければならないが、「この過去が、原的な（originär）時間直観の領野に属している限り、同時にそれは、現在でなければならない」(18)と、フッサールは言う。

フッサールのこの批判は、もっともであるように思われる。しかし、我々は、この反論が、フッサール自身の理論に

も当てはまるのではないか、と疑問を呈することができよう。というのは、ついさっき過ぎ去ったものは、一次記憶（primäre Erinnerung）において「直接に」観取されうると、フッサールも主張しているからである（41）。そもそも、過ぎ去ったものが、現在において何らかの仕方で保持され、直観されていないとするならば、時間の経過現象は、存在しないのではないだろうか。

この疑問は、当然であるようにみえる。しかし、フッサールがここで問題としていることは、過去が現在において直観されるという「こと」ではない。つまり、フッサールの、そして我々の問題は、過ぎ去ったものが保持されているとか、直観されていること、あるいは、瞬間的な記憶（ブレンターノの用語）がある、という「こと」ではない。そうではなくて、過去の現象の成立の根拠は何か、ということである。経過現象も、それが直観されている限り、今において存在するとみなされることもできよう（しかしこのことは、「今である」と決定しなければならない、ということではない）。だが、我々の問題は、経過現象の成立の叙述であり、それを、内容の変化という点に求められるのか、ということである。

先に我々は、経過現象の成立根拠を、内容の変化に求めれば、意識の作用の側面の相違がなくなることを指摘した。その場合、意識は、ただ、諸内容を反映する場にすぎない、と考えられる。例えば、赤という内容のような、時間的な経過を除外した内容に関しては、この考え方で問題は生じないかもしれないが、過ぎ去ったことが「今」示されねばならない経過現象の場合、内容がいかに変化しようと、それが単に反映されるだけでは、「内容の性質が弱まった」ことは現れうるとしても、「過ぎ去った」ことは、現れない。このことが、フッサールの批判である。ブレンターノの理論は、結局、経過現象における内容の変化を記述して、その変化の原因として産出的な想像を割り当てたことで終わって

いると思われる。記憶などの知としての意識の場自身の変化が、考慮されていないのである。このことから、経過現象は、作用的な側面を持つ意識そのものに関わる出来事であることが予想される。もちろん、この場合、「作用」とは、何らかの知に関わることであり、内容、あるいは、内容の契機そのものを産出することではない。我々は、作用を考慮したフッサールの理論を検討しなければならないが、その前に、時間意識の問題をより適切に位置付けるために、「意識全体の瞬間性のドグマ」を検討しよう。

2　直観の瞬間性について

「意識全体の瞬間性のドグマ」とは、W・シュテルンによって名付けられたロッツェの思想である。(4) フッサール自身は、『時間講義』の第七節でこの二人の説を簡単に紹介しているだけであるが、我々は、ここで挙げられたロッツェの考え方を次の二点について検討する。まず第一に、この考え自身は、フッサールが取り組んでいる問題ではないこと、具体的に言えば、我々にとって問題になっている時間意識の作用は、ロッツェの指摘する作用ではないこと、しかし第二に、ロッツェの考えは、時間意識の本質的な問題を指し示していること、である。

さて、ロッツェの考え方は、以下の通りである。「諸表象の順序を把握するために必要であることは、これらの諸表象が、それらを関係付ける知に対して完全に同時な諸客体であり、この関係付ける知は、不可分で唯一の作用において、これらの諸表象を全く不可分に統合する、ということである」(19)。例えば、bの表象が、aの表象の後に生じたとしよう。この場合、ロッツェによれば、これらの表象の交代はあるであろうが、この交代についての表象はない。bをより後のものとして知らせる比較が生じるためには、「無時間的に統合する知」(20) が必要である、とロッツェは言う。

ロッツェの問題が諸関係項の関係の把握にあることは、明らかであろう。しかし、ロッツェの扱っている関係や、関係を把握する知(意識の作用)とは、どの様な事態であろうか。一般に、関係についての知の成立には、諸関係項の把握が必要とされる以上、関係を把握する以前に、既に関係項は何らかの仕方で知られているはずであろう。もし、関係項が事前に全く知られていないとするならば、関係付ける知が初めて、諸関係項の出現と、それらの間の関係の出現とを一瞬の内に成立させる、ということになる。さて、時間表象の場合、関係項である諸表象が現れるためには、時間的な持続が必要である以上、それらを関係付ける知自身も、時間的に延長しているという性格を持たざるを得ないとするならば、このことは、「無時間的な知」というロッツェの規定に反することになる。従って、ロッツェが取り扱っている知(意識の作用)は、既に知られている諸表象の順序を顕在化させることそのものであろう。この知は、関係、あるいは関係においてのみ知られる対象(例えば、メロディー)についての把握(あるいは、その理解)である。この知が、フッサールが問題にしている経過現象そのものと異なることは言うまでもない。例えば、メロディーの知覚全体と、このメロディーが何のメロディーか分かることとの違いである。このことは、ロッツェが比較という関係の一つとして時間的な順序の関係を取り扱ったことによるからであろう。フッサールが問題にしたい作用は、このような作用ではない。

では、「無時間的」あるいは「瞬間的」な関係の把握が立脚している作用、つまり、諸関係項を時間的な順序に従って現している作用自身は、時間的に延長しているのではないだろうか。このことが、シュテルンの見解である。だが、シュテルンは、作用が持続している、ということ以上のことは述べていない。(5)

ところで、ロッツェの議論そのものは、経過現象の説明ではないが、しかし、経過現象の取扱いについて本質的な問題を提起している。我々にとってのロッツェの議論の意義はここにある。つまり、諸関係項の把握あるいは比較そのも

のは無時間的であるならば、既に知られているとされる諸関係項も、この作用において知られる限り、瞬間的ではないのか、ということである。言い換えれば、関係の把握という高次の作用の介入の前にでも、諸関係項は、「瞬間的直観の統一へと集まって来ている」(20)のではないか、ということである。この際、我々にとって問題になるのは、経過現象そのものの成立である。すなわち、経過という関係の把握だけでなくて、継続的なこととしての経過現象そのものも「同時に」直観されているのではないか。しかし、経過を経過として知るためには、また時間が必要なのではないだろうか。これが、時間意識の問題である。この問題に適切にアプローチするためには、「時間」や「意識」について、そして、意識において意識されているものの存在の仕方について、より的確な規定が必要であろう。

さて、ロッツェやシュテルンの議論に対して、フッサールは、ブレンターノへの批判の場合と同様に、統握作用と統握内容、それに、統握された対象の区別が欠けているから、問題が解明しないのだ、と言っている(22)。『論理学研究』以来使用されてきた、統握作用による統握内容の解釈という図式による解明である。しかし、この解明がフッサール自身の最終的な定式化でないことは、「あらゆる構成が、統握内容―統握という図式を持つことはない」という注(7, Anm.)からも知られている。そうであるとしても、この解明の難点を明らかにすることは、ある問題の所在を明らかにするために必要であると思われる。それゆえに、次に、「図式」による解明を概観して、そして、その問題点を見てみよう。

第二節　時間意識の作用について

1　「図式」による説明と、その問題点

『論理学研究』で展開された「図式」は、もともと言語的な経験領域に由来している。つまり、言語的な記号が、意味や対象の代表として把握されるという事態の説明として、この図式は使用されている。例えば、単なる模様として現れていたものが、急に意味を持つ記号として現れることが、それに当たる。また、この図式をフッサールは、外的な空間的事物の知覚の説明にも使っている。このような知覚についての説明から、経過現象の説明は生じたと考えられるので、まず、この知覚の説明を見てみよう。(6)

フッサールによれば、外的な知覚において本来的に直観されているのは、事物の一部分にすぎない。しかし、「現実の」知覚は、その現象だけからのみ、できているのではない。今は見えていない側面のような、それ以外の部分も、空虚な（leer）仕方で思念されている。そして両者が一緒に生じることで初めて、空間的な事物の知覚全体が成立するのである。この事態の説明としてフッサールは、事物のそれぞれの仕方の現出に、統握内容と、それを「解釈する（deuten）」統握作用とを記述上（deskriptiv）割り当てる。すなわち、事物の知覚は、様々な統握からできており、その統握の一つが、それに対応する統握内容を、直観的に与えられた事物の側面の本来的な現出として「解釈し」、その他の諸統握が、それぞれの統握内容を、事物の隠れた側面の非直観的な呈示として「統覚する（apperzipieren）」のである（なお、統握作用と統握内容とは、類としては全く異なるが、お互いに非独立的契機として実的に結合しており、それぞれ切り離されて存在することはない（XIX/1, 411））。

さて、経過現象の説明が、我々の問題である。この現象の「問題」とは、持続している対象の知覚の今の相（Phase）は、この対象の今の相だけでなく、その過去や未来の諸相をどのようにして含んでいるのか、ということである。この問題は「図式」を用いれば、以下のように説明される。今における知覚作用は、様々な統握からできている。それらの統握の内の一つが、今の原感覚の統覚によって、対象の今の状態へと向かい、他の諸統握は、変様された諸感覚内容（ファンタスマ）の統覚によって、対象の過去と未来との諸状態に向けられている。過去と未来との諸状態も直観的に与えられているが、それぞれの「時点」に応じた「明るさ」を持つとされる。このようにして、持続的な知覚対象の今の状態だけでなく、過去や未来の状態も一緒に直観されることになり、経過現象が成立する。この説明において、例えば、今の意識に対しては知覚作用を、過去の意識に対しては一次記憶の作用を割り当てることによって、「時間の起源」の問題の解決を内容に付加される契機に求めたブレンターノを乗り越えたとフッサールは考えた。

ところで、我々の関心は、図式に従った「解答」よりも、図式が妥当性を持っている理論の枠の特徴にある。「図式」による説明の我々にとっての問題は、一言で言えば、知としての意識とは無関係な次元から、意識をも含めた「現象」を説明した、ということである。すなわち、今や過去の意識という現象の基盤にある諸統握内容と、それらに対応する諸統握作用とは、そもそも、それら自身知られて（意識されて）いない場合には、そのようなものが意識そのものを生じさせられるかどうか、という問題である。

『論理学研究』第二巻第五研究における意識の説明において、「体験する」、「意識する」、「感覚する」という語は、心に（psychisch）ある（präsent sein）という意味で、「内的な知覚」ということは、現象学にとって第一には意味していない（逆に、このことによって、内的知覚に関する無限遡行の問題は回避される（XIX/1, 366））。「私が見るのは、

色のついた様々な物であって、色の諸感覚ではないし、私が聞くのは、歌手の歌であって、音の諸感覚ではない」(XIX/1, 387)[7]。この場合、フッサールにとっての作用とは、心的な体験を実的に(reell)組成している(komponieren)成素である感覚を「活性化し」、対象化(客体化)することである。対象に関わる知覚現象の次元(現象の次元)に、感覚という実的な体験の次元(現象学的な次元)が対応している、とフッサールは考えたと思われる。

この説明の問題点は、我々にとっては、知られることはない実的な体験の存在を想定する、ということにある。時間現象が主要な課題にならなかった『論理学研究』において、両者の次元の関係は、対応という規定しか与えられなかった。そこでは、時間的な推移を除外した、意識についての静態的な分析が中心であり、そのために、問題が露呈しなかったと言えよう。しかし、経過現象の説明においては、今までの考察から予想されるように、対象の経過の運動と対応した、意識自身の何らかの変化を考慮に入れなければならなくなる。その場合、自らにおいて時間を含んでいるメロディーのような対象についての知覚も時間的に延長している、と主張することから直ちに、フッサールは、この知覚を成立させる現象学的な次元においても時間的な規定を導入したのである。つまり、時間客観の持続を現象させる諸統握とそれらに対応している諸統握内容とは、連続体として、しかも、それ自身時間的な延長を持つ実的な連続体として、規定されることになった(例えば、228)。したがって、フッサールは意識自身を、対象的なものの一種として考えていたのである。このことが第一の問題であり、フッサールを「図式」の崩壊へと導いたと思われる(次項を参照)。以上は、意識の在り方をどう考えるか、という問題である。

第二の問題は、時間意識の説明に関わっている。フッサール自身も気が付いたことであるが(236)、意識の瞬間性のドグマが、この説明にも当てはまるのである。つまり、諸統握によって、経過現象の継起が、知覚の各々の相において

直観的に現象するとしても、この継起を継起として意識するためには、また、継起（時間）が必要なのではないか、ということである。経過現象の成立の説明において、今の時点には知覚、過去の時点には一次記憶というように様々な作用を割り当てて時点の現象の説明にしたとしても、経過現象そのものについての意識、つまり、この現象が、今、言わば「同時に」直観されているということについては、何の説明もない。

「図式」による説明は、その放棄（おそらく、一九〇九年頃）に到るまで問題とされなかった。その間に、現象学的還元という方法の発見や、それに相関して、超越論的な構成という問題系が露呈されたが、そのことは置いておこう。フッサールの考察が進むに連れて、（内在的で）実的な内容の客体化や、内的知覚に関する無限遡行の可能性など、様々な問題が出てきたが、「図式」が放棄されるまで、実質的な解明の方向は、与えられていない。

2　「図式」の放棄とその帰結

前項で提起された意識の在り方の問題を検討するために、我々は、フッサール自身の疑問を呈示し、次に、我々の帰結を導くことにしよう。

さて、「図式」を使用した説明によれば、対象についての知覚の今の相には、諸統握内容とそれらに対応する諸統握とでできている一つの実的で時間的な延長を持つ連続体があり、この連続体のそれぞれの箇所が、対象のそれぞれの時間的な位置に対応するように統握作用によって「解釈され」、その結果、経過が直観的に現象することになる。

この際、特に強調されるのは、作用の性格である。作用について、例えば、『論理学研究』第二巻第五研究の第一四節（初版）では、「様々な民族は、同じものを感覚するが、全く異なったものを知覚することがありうる」（XX／

1, 395) と言われていた。「異なったもの」を知覚させるのは、もちろん、作用の性格である。まとめて言えば、「同じ諸一次内容は、異なったものを呈示し、異なった事物統握によって、様々に異なった事物を現出にもたらすことがありうる」(322) ということである。

しかし、フッサールは、経過現象の説明に対して、次のような疑問を呈示する。「今の点において、我々は、諸一次内容の一つの連続体を同時に持っており、それに加えて、『統握』の連続体を同時に持っているのか」(322)。

これは、一次内容、あるいは、統握作用の存在の仕方の問題である。この場合には、具体的には以下のように考えられる。現象を成立させるが、それ自身そのものとしては現象しない諸一次内容は、「同じ今の中に」拡がっていて、従って、今である以上、どのような作用と結合したとしても、今でないことを呈示することは出来ない。つまり、今において「共存している (koexistieren)」諸内容は、「継起」ということを一緒に現すことは出来ないのである (322〜323)。[8]

フッサールが図式による説明の不可能性を述べているが、我々はこのことから、意識とは無関係な次元から、時間現象のような、意識における現象を説明することは不適切だ、という帰結を導けると思われる。

意識には決して現れない次元にあり、意識現象の原因に与する、「同時に」共存する諸内容が、継起という現象を何らかの仕方で呈示するとすれば、この現象は、現象させる次元と比べられうることで仮象になるであろう。問題は、仮象になるということで問題を打ち切ってしまうのではなくて、もし仮象されたとしても時間の現象は我々にとって存在し続ける以上、別の方法で適切にアプローチして考えなければならない、ということである。「刺激」の存在を認め、「実在的な」客観の領域と「非実在的な」心的な領域との存在を認める心理学 (例えば、ブレンターノ) の立場では、結局、時間の現象は、仮象になるとフッサールは言う (13)。この批判が、実はフッサールにも当てはまっていたのだ。

時間の問題を、仮象として扱わないようにするためには、意識の「中で」、意識独自のロジックを見出さねばならない。これが、現象学独自のテーマである。「『意識』は、どこまでも意識からできている」。――これは、「図式」の放棄に伴って述べられたフッサールの草稿の言葉である（XXIII、265）。

ここで、意識は、ある種の絶対性を受け取ることになる。フッサールの現象学において、意識の絶対性は、耳新しいことではない。まず、現象学的還元という方法の下で主題化された、明証的な確実性という意味での意識の絶対性がある。また、内世界的な（mundan）領野に対して、超越論的主観性の構成のはたらき（Leistung）があるという意味での絶対性も挙げられるであろう。しかし、この二つの絶対性は、その絶対性の根拠を、事実の指摘や、非存在の不可能性の指摘以外のどこから受け取ったのであろうか。絶対性の根拠は、事実の指摘や単なる要請にあるのではなくて、それは、我々の考察の仕方と内容とを我々に強いる必然性を持たねばならない。まさに、時間意識の分析において、このような根拠の一つが明らかになったと思われる。『論理学研究』の記述心理学の立場からフッサールを実質的に越えさせたのは、時間意識の考察の論理的な成果の保持にあると言っていいだろう。

以上は、意識を「外から」規定しない、という消極的な帰結であるが、他方、これまでの論述から予想されるように、意識にとどまる、積極的な理由がある。それは、経過現象の成立には、意識が不可欠である、ということに存する。つまり、経過するのは、単なる内容ではなくて、意識された内容である。例えば、過ぎ去ったものは、かつての今、かつての今に意識されたものであり、そのようなものとして意識され続けている。従って、意識される、あるいは意識され続けるということが、経過現象の不可欠な契機であり、時間意識は、言わば、意識についての意識、自己意識の一種の形を取る。それゆえに、時間現象の問題は、意識特有の問題になるのである。

さて、以上のことから、「図式」を使用してきたフッサールの議論に対して、二つのことが明らかになる。一つは、フッサールの現象学の中での時間についての明確な規定であり、もう一つは、感覚、あるいは、一次内容の問題である。

まず、時間について。時間という規定の方法が、フッサールにとって、まずは、意識されたもの、あるいは、意識されたものの順序に使用される以上、意識そのものには、使用されてはならない、ということである。意識の「中で」時間が起こる以上、意識自身を延長的な時間的規定で限定してはならないのである。例えば、先に検討された事象では、「同じ今の中に」経過に関する意識の諸内容がある、とは単純に言えなくなる。

もちろん、意識の中で、反省されて対象的に主題化された体験は、時間による規定を被るであろう。このような体験には、『イデーンI』に述べられているように、知覚などの作用や喜びなどの感情も含まれる。しかしこのような体験は、客体的に、客体のようにまとめられたものであって、意識そのものについての、あるいは、客体的には考えられていない意識の作用についての最終的な叙述、あるいは規定ではない。

次に、感覚について。「意識はどこまでも意識からできている」以上、意識されない感覚は、フッサールの現象学の立場では、認められなくなる。それに応じて、意識の作用も、意識されていないものを客体化し、現象させるという役目を持たなくなるのである。

また、意識や「自我」を「根源的に」発源させるような感覚も、それが意識されていないとするならば、認められはしない。というのは、発源させるものの在り方の規定の問題が残るからである。例えば、そのようなものが在るならば、それはまた、何らかの世界のようなものに属しているのではないか、という問いが生じるであろう。いずれにしても、発源させるという考えは、発源させるものや、その在り方が未規定であるならば、現象学にとっては使用されない。同

じ理由から、自己措定や自己分裂という概念も、意識そのものの在り方の規定には不適切であろう。

以上のことから、現象学にとっては、感覚、一次内容、そして原印象も意識されていることになる。先の草稿では、続いて「ファンタスマと同様に感覚もすでに、『意識』なのである」と言われている（XXIII、265）。

一般に、客体などの「質」を与えるものとして感覚を考えることができるが、しかし、フッサールの時間論においては、客体の「形式」である時間の構成にかかわる最小の単位として、つまり、経過現象を感性的な直観において現すものとして感覚を扱うこともできよう。同じ草稿において、「各々の感覚は知覚である。ただ、それは、完全ではない知覚であるのだ」（XXIII、267）。しかし、このように扱ったとしても、質を与えるものとしての感覚の存在を否認することにはならない。この問題に関しては、全く別の考察が必要であろう。

3　時間現象についてのフッサールの解決とその問題

「図式」の放棄を促した第二の問題とは、時間現象の成立の問題である。ここで、意識の在り方の規定に関わった、これまでのことを簡単に復習してみよう。

時間意識の問題は、継起という言わば時間的に延長している事象が「同時に」知られているのは、いかにしてか、ということである。この問題についてのブレンターノやロッツェ、シュテルンらの説に対して、フッサールは、統握という作用性格を考慮していないことを最大の欠点とみなした。何らかの作用が考慮されなければ、諸内容の変化のみが考慮され、そしてその場合、いかに変化したとしても諸内容は「同じ今」においてある以上、「過ぎ去った」ということについての真の経験はなくなる、という批判であった。そこでフッサールは、実的な諸内容を客体化し、現象させる統

握作用を導入した。しかし、今において「同時に」共存している諸内容は、継起ということを現すことは原理的にあり得ない。そして、この説明の仕方は、それ自身は現象しない、客体化される諸内容の存在が想定されることで、意識自身を局所化してしまい、その結果、時間現象が仮象とされる可能性を含んでいたので、放棄された。あくまでも意識の中で分析が進められねばならないことが明らかになったのである。

また、意識現象の次元で、それぞれの事象にそれぞれの名称を与えるだけでは解決としては不十分である。例えば、今の意識に対しては知覚、過去の意識に対しては一次記憶、あるいは把持（Retention）というように。継起が「同時に」直観される以上、経過現象のそれぞれの事象に異なった直観を割り当てることが、解決になるのではなくて、「同時に」意識（直観）されている「継起」の内実の解明が問題なのである。

つまり、この問題は、時間的な延長に関係する経過が、どのようにして、ある今において存在しているのか（あるいは、瞬間的に「同時に」直観されているのか）という矛盾である。どうして、過ぎ去ったものについての意識が「今」であるのか、とも言えるであろう。意識の存在が、ある今であると考えることも、そして、その意識の中で継起的な事柄が知られているということも、両方ともそのように考えられる以上、どちらも仮象としないで、いかにして解決できるか、ということが問題である。

そこで、フッサールは、意識されているものの所与性（Gegebenheit）への注目した。しかし、この場合の所与性とは、志向に関連した明証の度合いや、充実のされ方を基準とした所与性ではない。また、単に、客体が与えられているということを指摘するだけでもない。与えられ方と共に、その客体の存在の仕方についても考慮されているという点が、「図式」の放棄後の時間意識についての分析の特徴である。

意識の局面と、それに対応した意識されたものの存在の仕方の区分は、記述の三つの段階として、以下のようになされている（362）。

1、対象的なものを、その客観性という点で記述すること。

2、対象的なものを、その「現出」の様態（Wie）という点で記述すること。

3、次のような「意識」を記述すること。その意識の中で、ある様態で必然的に現出している対象的なものが意識される、そのような「意識」を記述すること。

この問題を、フッサールは、客体そのものの局面（1の局面）から、客体の時間的な与えられ方、つまり経過現象の局面（2の局面）を介して、意識の諸相の局面（3の局面）へと、分析の立場を転換しながら取り組んだ。

第1の局面において意識されたもの（客体）は、意識されているという面が言わば排除された、客観的な時間に従った存在の仕方をしている。この局面だけに留まっていれば、今と過去とが「同時に」存在する、ということは有り得ない。しかし、この矛盾が、時間の現象において生じるのである。

そこで、意識の局面が初めて注目され、第2の局面へと移行する。この局面は、時間現象についての矛盾した問題が明らかにされる局面である。ところで、「過ぎ去ったものが今も存在する」という矛盾が生じるのは、意識されているものの時間的な諸様態（例えば、「今」、「たった今」など）についての着目だけがあって、それらの存在の仕方についての規定が欠けているからである。

この矛盾を解消する第3の局面は、「時間を構成する（zeitkonstituierend）」とフッサールが呼ぶ、意識の諸相（あるいは、意識の諸現象）の、または、意識の「流れ」の局面であり、ここで、「同時に」直観されている「継起」の内

実と存在の仕方とが示されている。

今においてあるとされる、過去の諸事象の「連続体」が、いかに同時に直観されるか、という問題において、この「連続体」が、諸客体の連続体のような在り方をしていると考えるならば、連続体を連続体として捉えるために、その連続体の諸項を一つ一つ直観していく以上、また、時間が必要となる、つまり、同時ではなくなる。それだけではない。連続体をそのものとして直観するものは、その各々の項に対してただ対面するような仕方で直観するだけでなく、直観されたことを記憶しなければならない。このために、問題は、始めに戻る。

この「連続体」を、意識することとは異質な、実的なものと見なすかぎり、右の問題は解決されない。実的ではなくて、志向的と考えることで、問題に対して初めて接近することができる。この「連続体」の存在の仕方について、フッサールは、諸把持についての諸把持の志向的な「相互的内含（Ineinander）」（Ⅲ／1, 183）と規定している。「疑似（quasi）時間的な秩序」（82）とも呼ばれるこの内含は、以下のような相互嵌入（Ineinanderschachtelungen）の構造を持っている。(9)

さて、把持とは、意識の各々の相が、それに先行する相を志向的に引き留めておくことを指すが、引き留められた相もまた、意識の相である限り、把持という性格を持つために、その先の相を引き留めることになり、このことが続く。この場合、諸相は志向的にそれぞれ関係しているために、いわば「同時」に、フッサールの言い方では「先—同時（Vor-Zugleich）」（78）に存在しているが、それらの志向が「間接的」である（118）ということに、「継起」の現象を成立させる根拠があると思われる。つまり、一つの知覚の相を、時間を構成する意識の諸相について抽出してみれば、そこには、その原感覚と、その前の原感覚についての把持と、その前の前の原感覚についての把持の把持と……という意識の諸

相が、言わば「同時に」あり、そして、それぞれの相は、意識の相としてそれぞれの把持の度合いを介して、「過ぎ去る」という「時間を構成する」と、フッサールは考えたのであろう。意識されている内容をただ「直接的に」所持しているだけでは、過去は現象しないのである。以上が、経過現象に対するフッサールの最終的な説明である。

ところで、この説明からもわかるように、時間意識についてのフッサールのこれまでの課題は、意識における経過現象の成立の根拠であった。その結果、経過現象への問いの中には、今自身についての意識への問いが含まれていなかったと言っていいだろう。つまり、フッサールの課題は、今における過去の現象（意識）であって、今における今の現象（意識）ではなかったのである。過去の現象が、諸把持の相互嵌入によって解明されて初めて、今の意識、原印象（Ur-impression）が、フッサールにとって明確な課題になる。

原印象、あるいは「印象的意識」（29）、あるいは「原意識」（119）は、フッサールによれば、これまでの意識の諸相を志向的に所持しているのであるが、意識は流れることにおいて存在している以上、この原印象も、次の瞬間には把持されるものになる（把持するのは、次の原印象である）。この、把持する／把持される（意識する／意識される）という転換の仕方の問題もあるが、それよりも、把持するとされている原印象の在り方の問題がある。原印象自身は、意識されていないのか。もし、意識されているとすれば、それを意識しているものは、どういう在り方をしているのか。フッサールは後者の立場であるが（119）、そこでは、「意識されている」ということ以上の積極的な規定は行なっていない。

本節の2で、我々は、感覚、原印象も意識であることを確認した。しかし、その時には、一次内容の分析に関連していたために、意識されていると厳密に言われうるのは、原印象の内容だけであって、それを意識するものの問題はまだ

残っている。

次項で、我々は、まず、意識の諸相の相互嵌入という在り方における意識の自己構成を示してから、その観点より、原印象の問題をより明確にしようと思う。

おわりに

ところで、経過現象の成立において、意識の絶対性があることは前に（本節の2）見た。その絶対性とは、意識の外に、経過現象を成立させる根拠を持たない、ということであった。その結果、意識の諸相の相互嵌入という在り方が明らかにされた。この構造によって、そして、この構造において、時間的に延長した対象の統一が現出する（構成される）。つまり、このような対象の統一が現出するのは、この統一についての意識の統一（意識の諸相の統一）があるからであり、また、そこにおいてである(80)。しかし、意識のこの統一は、単にあるだけではなくて、現出するのだとフッサールは言う(83)。というのは、統一されているのは、対象的なものではなくて、把持を備えた意識の諸相であるからである。そして、意識の諸相の間の出来事であるからこそ、意識の外に根拠を持たないことになる。したがって、意識の相の意識が、経過現象の成立における意識の絶対性の内実を、すなわち、意識の自己構成（自己現出）の仕方を示すことになる。

意識の相についての意識とは、一種の自己意識の様相を呈しているが、では、意識するもの（構成するもの）と意識されるもの（構成されるもの）とは、どのような関係にあるのか。意識のある相と、その前の相とは、「内含」という表現からも予想されるように、前者が後者を含む、という在り方をしている。(10) そのようにして、後者は意識されるので

ある。「意識流の諸相において、同じ意識流の諸相が現象的に構成される」(83)。また、意識の諸相は、「縦の志向性(Längsintentionalität)」と呼ばれる把持によって統合されているので、それぞれ「同じ意識流」に属している。この「属している」という点において、それらは合致しあい(83)、意識の諸相をそれ自身の中で現している。

しかし、他方、それらの諸相自身は、嵌入関係にあるゆえに、「あらゆる点において、合致しあっていることはありえない」(83)とフッサールは言う。意識の相が意識されるためには、それが含まれる別の意識の相が必要なのである。そうであるならば、経過した全ての意識の相を包含し意識している最後の意識の相、すなわち、原印象自身は、直観的な現前野においては「自ら以外の意識と存在とに対する源泉点」(67)とみなされる限り、何者によっても包含されないことになる。つまり、原印象は、意識されないことになる。この場合、意識において意識されないものがあることになり、意識の諸相の相互嵌入としての意識の自己構成は、最終的な地点で成立しなくなり、意識の絶対性も保持されなくなる。原印象の問題を、意識の自己構成の視点からまとめれば、以上のようになる。

さて、この問題に対して何らかの仕方でアプローチすることができるとするならば、それは、原印象に与えられている最終性の内実を明らかにすることにあると思われる。フッサールがこの問題を実質的に解明できなかったのは、原印象を絶対的な意味で最終的であると想定したためであろう。

この想定に対し、我々は次の二つのことを述べよう。第一に、分析の成果が、その遂行の仕方によって限定されていること、つまり、上述の想定は、ある条件の下でのみ言われうることであり、第二に、もしこの想定に従えば、フッサールの現象学の体制が根本的に変わりうるということである。第二の問題は、フッサールの構成論全体に関わるので、ここではその概略のみを述べることにしたい。

第一の問題は、原印象を最終的なものとする規定の仕方に関わっている。フッサールによれば、過去の現象は、志向的内含の間接性によって生じるとされる以上、現在の現象は、志向的所持の直接性によって規定されるはずである。しかし、この直接性、あるいは、「絶対に変様されていないもの」(67)という規定は、専ら過去を現象させる志向的内含との対比から生じたに過ぎない。さらに、フッサールの分析は元来、感性的対象の経過現象の説明に限定されている以上、原印象の現在は、現在の意識の全てに関わっているとは言えない。従って、この直接性とは、無条件な絶対的な意味でそう言われているとは考えられないであろう。そもそも「直接」ということの内実や在り方が明らかにされていない場合には、この概念で事象を最終的に説明することはできない。

第二の問題は、原印象のもう一つの最終的な性格に関わる。それは、源泉としての原印象である。原印象は、例えば、「それ以外のすべての意識と存在とに対する源泉」(67)とされているが、このことは、「意識とは無縁な性質を持つ(bewußtseinsfremd)」(100)原印象の内容の産出にも関わっていると考えられる。しかし、産出というこの役割を原印象に認めたならば、意識の作用面は、また、「構成」や「総合」はどうなるのであろうか。結局、ブレンターノと同じ立場になるのではないだろうか。

従って、我々の結論は、次のようになる。原印象は、時間現象の意識においては、最終的な意識ではあるが、しかし、絶対的に最終的な意識とはみなされない、ということである。つまり、原印象をも自らの内に含んでいる意識の作用が想定されうる。[11] そのような意識の内実の考察は、今後の課題である。

フッサールは、対象との相関関係において作用を主に考察したが、この相関関係から直ちに、作用にも時間性を帰することが少なくなかったと思われる。作用が対象と関係しているとしても、専ら対象的なものの秩序である時間によっ

て作用を整序することは、作用を対象的なものとして扱ってしまうために、作用の特徴を隠してしまうことになる。だからと言って、無時間的な作用を問題にするのではない。時間が、最終的な問題になるかどうか、そして、時間によって様々な問題を適切に取り扱えるかどうかを検討する必要があると言いたいのである。時間からの還元を行い、意識の作用を再考することで、今までとは別の現象学の問題が生じてくるであろう。

注

（1）時間意識が問題になるので、『イデーン』期までのフッサールの分析が中心になる。使用するテキストは、E. Husserl, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins* (1893-1917), Husserliana Bd. X, Martinus Nijhoff, 1966. であり、そこからの引用の頁数は、文中括弧内の数字で示す。また、他のフッサールの著作からの引用は、フッセリアーナにおけるその巻数のローマ数字と、頁数とを並べて表示する。

（2）「図式」の難点が明らかになった時間意識とは、直観的な現前野における経過現象についての意識である。したがって、再想起（Wiedererinnerug）や客観的時間の成立の問題は、取り扱われない。

（3）このような仕方で考察を行うので、小論では、批判される限りでの各々の思想が呈示されることになる。

（4）H. Lotze, *Metaphysik*, Felix Meiner, 1912, S. 286-298. シュテルンに関しては、フッセリアーナ第十巻の編集者による引用を参考にした。

（5）例えば、シュテルンの主張は、時間についての統握は、「時間的に延長している意識内容に基づいてのみ、成立する」（20, Anm.）など、意識に時間を導入しているだけで、導入された時間に関しては何も説明していない（20~22, Anm.）。

（6）「図式」による時間意識の説明が、『論理学研究』第六研究の感性的な知覚の説明と類似していることは、ベルネの以下の序論を参考にした。

E. Husserl, *Texte zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins* (1893-1917), herausgegeben und eingeleitet von R. Bernet, Felix Meiner, 1985, S. XXVII-L.

（7）実際、『論理学研究』においては、意識されていると見なされうる実的な内容も述べられている（例えば、MX／1, 398）。しかし、後述のように、「図式」の放棄を促したのはこのような内容ではないので、小論では取り上げないことにした。なお、実的な内容の性格が曖昧であるのは、フッサールが当時の心理学の影響を受けていたからであろう。

（8）同じ箇所をブラフも検討している。しかし、彼は、「同じ今」にある諸内容を、意識に現象している次元で捉えており、我々のように、現象学的な（意識に現象させる）次元で捉えていない。現象の次元での矛盾、つまり、「同じ今において」過去の諸内容が現象しているということは、フッサール自身も以前から気付いている（236）ことであり、図式の放棄を促してはいないと思われる。

J. B. Brough, "The Emergence of an Absolute Conciousness in Husserl's Early Writings on Time-Consciousness" in *Husserl. Expositions and Appraisals*, ed. by F. A. Elliston and R. McCormick, University of Notre Dame Press, 1977, p. 92 f.

（9）相互嵌入という概念は、『イデーンI』における想起についての想起の説明に使われている（III／1, 235–236）が、想起が意識の作用である以上、把持についても事情は同様であると思われる。

（10）意識の諸相の相互嵌入という事態に対して、意識の「流れ」という表現が使われることは不適切であると思われる。この語が比喩であることにフッサールも注意しているが（75）、問題は、この語が構成されたものに従って名付けられている（75）ということよりむしろ、それが、流れるものを、しかも、時間的に連続的に延長しうるものを想定させるということにある。もちろん、「流れる（fließen, strömen）」と変えても事情は変わらない。上述のように、「ある今に属する」（75）とされる先―同時的な志向的内含が問題になっているのであるから、個体的なものや、あるいはその集合体を想定させる「流れ」という語は、問題の所在を隠す可能性があるので、最終的には使用しない方がよいであろう。

（11）フッサールの時間論において、作用は、時間意識において構成されたものとみなされている（例えば、84）。しかし、この場合の作用は、経過現象の次元で時間的に構成された「純粋な感覚与件」（XXV）と関わっている作用であるか、あるいは、それらの与件の現象に基づいている限りでの作用であると思われる。果たして、このような与件との関係においてのみ、作用は生じているのであろうか。内的意識の全体的な構造については、稿を改めて検討したい。

（博士課程学生）